

## 『ド・ゴール大戦回顧録』第三部「救済」 第2章「地位」<sup>1)</sup>にみる国家像

有 田 英 也

「いまやだれかがいる。それは私自身であり、立っている！ そのひとが私自身の声で話しているのが聞こえる、そんなだれかが！」

ポール・クロードルがド・ゴール将軍に捧げた頌歌 1944年9月<sup>2)</sup>

はじめに

個人の回想が国史として読まれるのはどのような場合だろうか。国史が、為政者個人の回想も含む史料を取捨選択し、一定期間、一定地域の制度の変化に、論理にせよ神話にせよ何らかの筋道をつけたものであるならば、実際に個人の回想が国史として読まれるには、どのような歴史的・文化的条件が必要だろうか。

こう問えば、さしあたり次のような反問が予想できる。読むことと書くこととの間には、談話実践と教室での訓練によって強化されるような相互関係がないだろうか、と。また、ここで言われる「国」とは政体なのか、民族なのか、カリスマ的な為政者その人なのか、それとも「政治的無意識」（ジェイムソン）や「共同幻想」（吉本隆明）といった観念によって仮構される実体なき形象なのか、と。これらの反問に返答するには、「国」の歴史をいかに読むか、そしていかに語るかという問いが必要である。「国」とは歴史的・文化的構築物に他ならず、そのかぎりでは風景からおのずと了解される甲斐の国などの土地というより、また地縁血縁のような帰属感に根ざす郷土というより、端的に「国家」を意味する。ある特定個人の回想が「国家の回想」として国民に読まれるために、

学校と学校外の文化伝達機構は、歴史上、どのような働きをしてきたのだろうか。個人的回想を「国家の回想」として読ませるには、何をどのように書けばよいのだろうか。

本論はこれらの問いに答えるため、まずフランスの回想録についての歴史的考察に依拠する（第1節 国家の回想録）。次いで、国家の危機を経験した国民が、ひとりの危機打開の中心人物の回想にみずからの歴史を読みとる仕組みを特徴づけるべく、具体的作品を例にとり、その語りの技法（第2節 語りの宗教的次元）と主題（第3節 偉大さへの意志）を分析する。そこでは同じ事象を経験しながら、国民ごとに異なる歴史観を抱く過程が示唆されるだろう。

この作品の著者と出版の時期は特筆に値する。第二次世界大戦中の1940年6月に休戦したフランスは、枢軸国に国土を三分され、第三共和制を廃したヴィシー政権が実質的な対独協力に踏み切った。このとき「自由フランス」を旗標にロンドンと植民地から巻き返しを図ったシャルル・ド・ゴールは、1944年6月、共和国臨時政府の首班となった。彼は戦後初の議会選挙後に成立した憲法制定議会によって政府首席に指名されながらも1946年1月に辞任し、その後はみずからフランス人民連合を結成して第四共和制憲法の批判を続け、ついに1953年に政治活動を停止した。翌年1954年、『ド・ゴール大戦回顧録』第一部「呼びかけ」が出版される。本論で扱うのは、アルジェリア危機にさいして強引に政権を担当した「ド・ゴール将軍」が、第五共和制の初代大統領に選ばれた1959年に出版した最終巻たる第三部「救済」である。すでに拙論で触れたように<sup>3)</sup>、1958年以降の「将軍」が体現した権力は、一部の知識人からファシズムと同一視される一方で、かつてのレジスタンス諸派の知識人に少なからぬ信奉者を得た<sup>4)</sup>。ある特定個人の回想が「国家の回想」として読まれることの問題性を論じるのに、これほど適した作品はない。しかも、フランスでは最近、この回想録の一部が、大学入学資格を得るための必須学習項目に選ばれて物議をかもした。2010／2011年度バカロレア文学部門（bac L と呼ばれ約5万人が受験）の「国語」では、真実であると主張する特定個人の回想が全国的に学ばれることになったのである<sup>5)</sup>。

もとより本論の筆者は、フランス現代史における危機も、フランスの初等・中等教育も体験していないし、ある特定の国家像をフランスに対

して持つように、あるいはそれを批判するように要請されているわけでもない。一般に「ド・ゴール神話」「ゴリズム」と呼ばれる現象を、他者として、しかし内在的に理解するために『ド・ゴール大戦回顧録』を取りあげた。

## 1 国家の回想録

フランスを代表する歴史家、あるいは学術ジャーナリスト、ピエール・ノラは彼の編になる『記憶の場所』の「国民、国家（La Nation L'Etat）」でド・ゴールの『大戦回顧録』に注目した。なぜなら、逆説的なことに、「国民の集合表象とあまりに深く結びついているために、今では共倒れにならざるをえない伝統」、すなわち回想録が、もはや書かれなくなる一方で、今日ほど読まれている時代はないからである<sup>6)</sup>。はたしてそれはノラが挙げるように、政治史と国制史から社会史に舵を切ったアナール派歴史学と精神分析学の影響で「伝記の地平」が一新したからか、それとも極右さえ国家元首が国を体現するとは考えないほど共和主義が定着した今日にあって、王および皇帝とあまりに深く結びついた文学ジャンルが、かえって懐古趣味を刺激するためか、その理由を推し量るのは本論の筆者の力量を越えている。本論第1節「国家の回想録」では、ノラの論を紹介することで、近代以降のフランスの知的読者が、どれだけ自分たちの国の歴史を、傑出した為政者自身の回想録、あるいは側近の筆による年代記に見いだしたがってきたかを示すにとどめよう。

ノラは、「フランスに日記と回想録はあっても歴史はない」というヴォルテールの言葉を引きながら、歴史学の世紀（19世紀）に先立って、回想録が文学というより歴史そのものとして読まれた時代があったと示唆する。『ルイ14世の世紀』（1751）の著者ヴォルテールは、はじめて文獻に対する厳密な資料批判を行ったことで知られている。それまでの回想録では、叙述の対象はいわゆる秘事であり、政策決定の内情、権力内部の確執、あるいは閨房の秘めごとなどが、辛辣な、もしくは同情的な人物描写（「肖像」）とともに書かれていた。だが、ヴォルテールは、時代を特徴づける言説を吟味し、みずからの属する市民階級の勃興を徴づける一個の文明論として作品化した。

次いでノラは、ともに19世紀半ばに公にされたシャトーブリアンとギゾーの回想録に注目しつつ、貴族たるシャトーブリアンの『墓の彼方の回想』(1848-1850)が、ひとつの社会階層の没落を描いたものであるなら、平民ギゾーの『われらの時代の歴史に奉仕する回想録』(1858)は、市民階級の自分史として読めると言う。19世紀半ばに、それぞれの回想録が主役とするふたつの社会階層が入れ替わった。そして、社会史的な変化に対応する新たな回想録が書かれ、読まれたわけである。

だが、ノラが「国家の回想録 (*Mémoires d'Etat*)」と呼ぶものは、ひとつの散文ジャンルの理念形を表す。それはルイ14世、ナポレオン、ド・ゴールの回想録を典型とし、いずれも国家元首の回想録である。精神分析学が読者に与えた影響を考慮して、特定の社会階層の代表ではなく、「わたしたちの国家の超自我」<sup>7)</sup>とされる。

ノラを敷衍してジャンルの規範を挙げれば、国家枢要の人物たちの事績と国家の劃期的出来事の真相を、年代記とは異なり(修史官など)専門家ではなく、元首みずから書いたものとなるだろう。下位ジャンルとして側近によって書かれたものがある。また「元首みずから」と言っても、ルイ14世は、1661年の親政開始後まもない1668年に執筆を命令したものの、たとえば執筆を任されたラシーヌはベルギーでの戦闘を記録してはいるが回想録そのものは残していない。ナポレオンの『セント＝ヘレナ覚書』(1823)はラス・カーズの聞き書きである。ド・ゴールのみ『大戦回顧録 (*Mémoires de guerre*)』3巻(1954-1959)を上梓したものの、次の『希望の回想 (*Mémoires d'espoir*)』(1970-1971)は著者病没のため未完である。

その主題は国家および社会の危機と克服であり、新体制の構築者が語りの主体(ないし語りの主題)となる。つまり、ルイ14世は、高等法院など中間団体および封建貴族の王権に対する反発(フロンドの乱)を経て、絶対王政を築いた。ナポレオンは、革命の混乱を收拾して権威的体制(帝政)を樹立した。ド・ゴールの最初の回想録の主題は、1940年の敗戦とヴィシー対独協力政権、占領地の解放と民主的・共和的体制への移行、そして退陣までである。第二の回想録は、アルジェリア危機を経て、大統領権限の強い第五共和制が、植民地の維持を意図して成立するまでの部分が執筆され、公刊された。ド・ゴールの回想録は、本人によって語られたがゆえに、本論でその語る主体を丁寧に吟味することに

した。

なぜなら、ノラによれば、これらの典型に対して相補的な「国家の回想録」が側近によって書かれており、それもまたシュリー、リシュリュ、ギゾーなど大臣（奉行）によるものと、レー枢機卿、サン＝シモン、シャトブリアンなど「権力の文学者たち」<sup>8)</sup>によるものに分けられるので、「元首（の経験者）みずから書く」ことの意義を考えねばならないからである。いかにして自身が「国家」を自己言及的に語れるのか、という説話論的問題を、ノラは論文第3節「国家の回想録、国家の記憶」<sup>9)</sup>で検討している。ノラの分析は本論の続く第2節で参考にしよう。典型3作がすべて、そして側近のそれもおおむね失意のうちに、つまり権力の中核にあって疎外されながら成立していること、国民意識の覚醒（あるいは覚醒する要請）に応じる回想録であること、それがノラの結論である。

## 2 語りの宗教的次元

ド・ゴールの『大戦回顧録』がノラのいう「国家の回想録」に属しても、書き手が準拠したと思われるジャンルは他にもある。枢機卿など、王の助言者であった上位聖職者の回想を思わせる箇所が『大戦回顧録』に散見される。

第三部「救済」(Le Salut)には明らかに宗教的含意がある。第一部「呼びかけ」(L'Appel)は旧約の預言者に即せば神から使命を伝えられる「召命」(たとえば『イザヤ書』)とも読める。本文でもド・ゴールから1944年11月11日（第一次世界大戦戦勝記念日）にパリに招待された英首相チャーチルは、フランス国内軍の行進を見て、「復活の場にいあわせているのだと思いました」と語ったと回想され (V50-636)、「よみがえったフランス国軍」を視察させたのは英国首相の「悔悟」を誘い出す絶好の機会だったと述べられる (V51-638)。ド・ゴールは聖書の「歴史」を語るように、自国の「歴史」を語っているのだ。

この点でド・ゴールの回想は、たんに助言者にとどまらず、かつて為政者そのものであった人物の回想であり、彼の国家についての感情が、彼の語る「歴史」の「気分」をなしている。それは本論で特に注目する箇所についていえば、フランスの格下げを食い止めようとする強い意志

である。

1944年6月6日の連合軍のノルマンディー上陸作戦にあたって、ド・ゴールはぎりぎりまで上陸地点を教えてもらえなかった。第三巻「救済」の「地位」は、1944年秋から暮れにかけての数ヶ月を、いまだ脆弱な共和国臨時政府の首班の視点から語っている。前巻「統一」の最終章「パリ」から「救済」の第1章「解放」にかけて、ドイツ軍占領地を次々と奪回してフランス国軍を再建した臨時政府は、次にその実力を連合国に納得させて戦後秩序にあるべき「地位」もしくは「格」を勝ち取ろうとしていた。その内容は、まさしく「国家の回想録」にふさわしい。だが、語り手は、ノラの言葉を借りれば、「個人の行動を国家の決定的瞬間（moment）と同一化させている」<sup>10)</sup>ののだろうか。というのも、国際連合構想が話し合われたワシントン郊外のダンバートン・オークス会談にフランスは招かれず、ドイツの降伏条件とソ連の対日宣戦を決する英米ソ連の交渉もフランス抜きであったことを、『大戦回顧録』読者はよく知っているからである。ド・ゴールはいつ、どのようにして権力の正統な所有者となり、もってみずからの言葉で国家の歴史を叙述する権利を得たのだろうか。

この点で興味深いのはパリ解放にさいして、ドイツ軍に連れ去られたフィリップ・ペタンの使者から政権委譲の申し出があったのを、ド・ゴールが拒否する「統一」の最終章「パリ」の一節である。「フランス国元首」ペタンは内戦の危機をはのめかし、ド・ゴールを立てて収拾をはかろうとした。だが、とド・ゴールは言う、「解放国土上には、ペタンに忠誠を守ろうとド・ゴールと戦う身ぶりを見せるものは、ただひとつの県、ただひとつの都市、ただひとつの村、ただひとりの官公吏、ただひとりの兵士、さてはただひとりの私人すらいないのである」（IV155-582）。三人称の叙述で民心を語ったド・ゴールは、今度は一人称で、「＜歴史＞の底から発した呼びかけに、次いで国の本能に導かれて、私は相続人のいない宝物の責任を負うこととなり、またフランスの主権を行使する（*assumer la souveraineté française*）こととなった」<sup>11)</sup>と、権力の正統性を宣言する。ド・ゴールに権力を委譲する前任者はいない。したがって、抵抗の不在という民衆の行動に、歴史と国の本能という超越論的な根拠を見てとった人物は、主権者（至高者）となった自身を発見した後に、祖国フランスの救済劇（と下野の物語）を語ることになる

だろう。第二巻「統一」の末尾は、3年後に出版される第3巻を見越して、「いまや民衆と導き手とは、たがいに助けあいながら救済への道程を歩み始める」(IV156-584)と結ばれている。すでに第一巻「呼びかけ」末尾でも、自分は祖国に対して、「救済の道をさし示している息子」(II71-262)だと書かれていた。そこにはプレイヤッド版の註と序説でクレミュー＝ブリラックらが言うように、ド・ゴールの好んだシャルル・ペギーの詩句への目配せがある。

だが、それは他の主権国家がすぐに認めてくれた「地位」ではない。この危機的な時期に、ド・ゴールはチャーチルをパリに招き、エジプト国王を訪問してからソ連に赴いてスターリンと会談し、帰路、保護国チュニジアで太守Beyと会った。そして、ヤルタ会談の直前、ルーズヴェルトの特使ハリー・ホプキンスと会談した。『大戦回顧録』には別に資料があり、邦訳はこれを合わせているが、書簡やコミュニケによって記憶にもとづく会談の様子が裏付けられている。たとえば、フランスは1944年12月、ソ連と同盟・相互援助条約を締結するが、「地位」では条約文書に署名した後、夜食のさなかにスターリンは杯を捧げながら、「自分はフランスが大国にして強国であることを希望している、なぜならロシアには大国にして強国である同盟国 (un allié grand et puissant) が必要なのであるから」(V76-665)と述べたと回想されている。ド・ゴールは歴史家に先立って自国の歴史を語り<sup>12)</sup>、そこに祖国の救済という宗教的修辭を施した。

### 3 偉大さへの意志

歴史家に先立って歴史の真実を国民に知らせるために書くとは、どういう人物なのだろうか。クーデターに近い政権奪取を果たした1958年のド・ゴールならば、退陣後の失意のなかで書かれたと思われる『希望の回想』の一節が、語り手「ド・ゴール」がテキストにしか存在しない一個の虚構であることを明らかにする。すでに拙論に引いた箇所を含んでいるが、もう一度引いておこう。

「ここにわたしは、フランス民衆がわたしになす例外的な信用によって強制されている。ここにわたしは、かつてないほどあのド・ゴールとなるべく強いられている。」<sup>13)</sup>

文中で語る「わたし」は、歴史的現実としては「シャルル・ド・ゴール」であっても、文中ではあくまでも、人々が「あのド・ゴール」と呼ぶ1940年の歴史的人物になろうと努める1958年の人物である。このように1940年と1958年の距離が、道程として意識化される。意識されても、「わたし」は自分がやり遂げたと知っている。その一方で、『希望の回想』が執筆された1969年以降の「わたし」と文中の1958年当時の「わたし」との距離はほとんどなく、文中の「わたし」は出来事を、考える暇なく物語に取りこんで語っているように読める。

このパラグラフは、「指導者の卓越せる威厳、奉仕者の重き鎖！」と、権力に目を奪われたダモクレスを論ず王のように語って結ばれる。だが、未完に終わった二度目の回想録は、必ずしも言葉の次元で政権奪取の正当化に成功していない。みずからが創始した第五共和制の初代大統領ド・ゴールの為政者としての正統性は、相継ぐ国民投票によって「民の声」をたえず確認して、いわば事後的に得られたからである。『希望の回想』には、「機が熟せば、わたしは民衆に、わたしを是認するかどうか尋ねるだろう。そのとき、わたしにとって、その声は神の声となるだろう。」<sup>14)</sup> 11年後、過半数を獲得できなくなったとき、ド・ゴールは即日、大統領職を辞して隠棲した。これと同時に執筆が始まったといわれる『希望の回想』は、1958年の政権奪取とアルジェリア問題、核開発、冷戦下の外交のみずからの果たした役割を、民衆にもう一度知らせる一種の「遺言」であったはずである。事実、『希望の回想』は三巻がそれぞれ1970年、1971年、1972年に刊行されることになっており、辞任がなければ二度目の任期（7年）満了の1972年に、文字通り政治的遺言として完結するはずだった<sup>15)</sup>。政権奪取の正当化は、既成事実とは異なるやり方で、これも事後的に成立するのである。

一方、1944年の秋以降を語る『大戦回顧録』第三巻「救済」の「地位」では、すでに政権の正統性を超越論的な論拠（歴史と国の本能）によって言い切ったとはいえ、フランス民衆のためにフランスの地位を回復する為政者の姿が言葉で描き出されねばならない。回想録の「わたし」が未来を向いているのは、歴史家の評価に先立って、民衆が「ド・ゴール」を切望したと書かねばならなかったからである。

このとき、『大戦回顧録』と未完の『希望の回想』を通底する「偉大さへの意志」が、当時の臨時政府の課題とぴったり重なる。『大戦回顧



録』冒頭で、有名な「偉大さ」への志向を語っているのは、幼年時代の回想を始めた回想録作家そのひとである。「生涯を通じて私は、フランスについてある種の観念を胸のうちに作りあげてきた」と書き始めた「わたし」は、「つまり私の考えでは、フランスは偉大さなくしてはフランスたり得ないのである」(I6-5)とパラグラフを結ぶ<sup>16)</sup>。まさしく、「個人の行動を国家の決定的瞬間と同一化させて」(ノラ)、国家のために尽くす瞬間を待ち望んできた書き出されている。

「救済」第2章「地位」は「偉大さ」とその派生語に満ちている。「わたし」は「フランスがこの方向に向かって偉大な行動 (grande action) を実践し、重要な役割 (grande figure) を果たし、自国ならびに人類の利益におおいに (grandement) 奉仕することができる、とは確信していたのである。」(V48-634) 戦後秩序の構築からフランスを仲間はずれにしていたのが、英米ソ連中国の「四《大国》 (grands)」である。だから、チャーチルを第一次世界大戦の戦勝記念日にパリに招待し、ナポレオンの墓を詣でさせた。イギリスと戦って敗北したフランス皇帝について、チャーチルは、「世界中で、これ以上に偉大な (grand) ものはなにひとつありません」と語った (V49-634-635)。その言葉は、次の憶測へと引き継がれる。他の大国に配慮していたにちがいないが、「それでも彼ら [チャーチルとイーデン] は、フランスへの信頼をあらわし、また、フランスがふたたび大国のあいだに席を占めることになるとういう確信を表明することは、忘れなかったのである」(V51-637)。

ド・ゴールは、フランスの「偉大さへの意志」が大国に理解される様子を読者に伝えようとするが、それは中流国への格下げを恐れる本心の現れであろう。実際、この時期のド・ゴールは、チャーチルを除いて、むしろフランスの落ちた「格」を思い知らされることになる。「フランスの地位および権利について私がいっていた観念が、世論に働きかける人たちのおおくからはあまり同調されないのだということを、私はたしかめざるをえないのであった」(V86-676)。

#### 4 声が文字となり、文芸となって学ばれることについて

「地位」の叙述は、ド・ゴールにとって特権的な「声」に言及して結ばれる。獲得できたものはまだ約束に過ぎない。「敵国の運命をとりき

め、平和を組織するために、大国によって作られる集会「アレオパゴス」の一員にただちになってほしい」(V86-676)と、フランスを排除したヤルタ会談の参加国から依頼があり、かつては大国から「容認の見せかけを得ていたヴィシー政府も、もはやあとかたすらなくなるであろう」(V86-677)と語られてはいるが、それも予想にすぎない。世論はむしろド・ゴールに敵対している。だからこそ、「1940年6月18日に開始された企て」、つまりロンドンからのラジオ放送で彼が訴えた徹底抗戦と、英国が支持した臨時国民委員会、後の自由フランスという「声」の記憶が呼び出される。その「声」の主と、「声」に従った者たちだけが、「フランスの子どもにとっても、また世界全体にとっても、つねにフランスでありつづけるであろうところの、まさにそうしたフランス」(V87-677)によって鼓舞されていたからである。

そして、「声」は「6月18日の男」のものから、子孫と世界に語りかける回想録作家の「文字」に変わる。なぜなら、「地位」の最終センテンスが言うように、「真実から始めないかぎり成功はない」(V87-677)からである。歴史家に先がけて、ド・ゴールが書かねばならない。

だが、書くド・ゴールは教育家であって、行動する將軍ではもうない。プレイヤッド版に「序説」を寄せたクレミュー＝ブレラックが冒頭で強調しているように、病死する数週間前にド・ゴールは、「わたしの行動に随伴した談話と書き物のすべてにおいて、わたし自身とは、教育に努めた者以外の何であつたろうか」と、未完の回想録の公刊された最終章に書きつけた<sup>17)</sup>。

『大戦回顧録』が完結して半世紀後、第三部「救済」はフランスのすべての高校で文科系の必修教材となった。多くの子孫たちが、歴史家らの史料批判を経ずにこれを「文学」として学ぶだろう<sup>18)</sup>。

(本論文は平成23年度成城大学特別研究助成「フランス公教育におけるフランス語古典文学の位置づけが作品受容に及ぼした影響」の成果報告である)

## 註

- 1) ド・ゴールの回想録 *Mémoires de guerre* の表題、巻および章の題は村上光彦の既訳を踏襲するが、行論に応じて適宜、語句を入れ替えた。その

責は筆者にある。Le Rang「地位」は、不名誉な対独協力政権が瓦解したとはいえ、英米ソ連に対するフランスの「地位」回復が主題であるからには、「ランク」「格」と読むべきかもしれない。『ド・ゴール大戦回顧録』からの引用は、みずず書房の翻訳とブレイヤッド版原書の参照ページをそれぞれ（V50-636）と本文中に示す。後者は『大戦回顧録』と未完の『希望の回想』の合本である。Charles de Gaulle, *Mémoires*, Gallimard, 《Pléiade》, 2000

- 2) 《Au général de Gaulle》, *Œuvres poétiques*, Gallimard, 《Pléiade》, 1957 邦訳 V126を参照しつつ直訳に改めた。このオード（頌歌）は1944年9月28日にパリで制作され、1945年に公開された『30年戦争のあいだの詩と言葉』に収録され、1952年刊の『クロデル全集 詩2』に再録された後、ド・ゴールの政権復帰の前年、1957年にブレイヤッド版に再録された。この詩で語っているのは「フランス」であり、ド・ゴールは「ムッシュー将軍」「わが息子殿」とさまざまに呼びかけられる。ド・ゴールは礼状（1944年11月18日付）に、「かくも多くの思いがけない支援があったからには、わたしはフランスが強国に復帰すると信じます」と書いている。Charles de Gaulle, *Lettres, notes et carnets 1942-mai 1958*, Robert Laffont, 2010
- 3) 「ド・ゴールの未完の回想録における偉大さへの意志について」「6月18日の男」をどのように思い描くか——アンドレ・マルローとモーリス・ブランショの見たシャルル・ド・ゴール』『成城文藝』210号、215号
- 4) フランソワ・モーリヤック、ド・ゴール体制の文化大臣マルロー、アカデミー・フランセーズ入りしたジャン・ポーランなど。以下に詳しい。Jeannine Verdès-Leroux, *Refus et violences Politique et littérature à l'extrême droite des années trente aux retombées de la Libération*, Gallimard, 1996, pp.403-420
- 5) 必須学習内容は下記。
  - ホメロス『オデュッセイア』第5～13歌（文藝の「主要産地」と古代の規範）
  - ベケット『エンドゲーム（勝負の終わり）』（現代文学）
  - キニャール『めぐりくる朝』とアラン・コルノー監督映画（言語と映像）
  - ド・ゴール『大戦回顧録』第3巻「救済1944-1946」（文学と論争）
- 6) Pierre Nora, 《Les Mémoires d'Etat De Commynes à de Gaulle》in P. Nora (dir.), *Lieux de mémoire*, II La Nation, t.3, 1986, 《Quarto》I, pp.1383-1427 引用は p. 1385
- 7) *id.*, p.1417 後述するように、ノラは社会の大変革と国家存亡の危機にさいして、国民（ないし領民）がみずからの拠り所を為政者のイメージに求めて集合表象ができあがった、つまり個々人のアイデンティティの危

機を国家像の更新で乗り切ったと考えているようである。

- 8) *id.*, p.1416 原文《littérateurs de l'Etat》 シャトーブリアンの例を考えるとこれを「御用文学者」と呼ぶわけにはゆかない。「文学者」という概念そのものの歴史性については以下を参照。Alain Viala, *Naissance de l'écrivain*, Les Editions de minuit, 1985『作家の誕生』塩川徹也監訳、辻部大介ほか訳、2005年、藤原書店 未完の回想録原稿と資料の整理を任された人物をすべて「側近」と呼ぶこともできまい。第四共和制初代大統領ヴァンサン・オリオル（在任1947-1954）が残した数千頁の草稿と執務机に隠したテープレコーダーの記録を1970年代に校訂出版したのは政治学院の歴史家ルネ・レモンをはじめとする現代史家であり、ノラも第1巻の編集に加わっている。Nora, *op.cit.*, p.1425
- 9) *id.*, pp.1406-1418 ノラが依拠するのは回想録作家の伝記が主で、文学ジャンルについては自伝のルジュヌス、自画像のボージュール、回想録のフュマロリなどいわゆる文学史研究に限られる。とはいえ、ド・ゴールの『大戦回顧録』とブルーストの『失われた時を求めて』それぞれの冒頭1行を突き合わせた最後の註は卓見といえる。
- 10) *id.*, p.1413 ここにテースのいわゆる「種族、環境、契機（race, milieu, moment）」を連想してよいかもしれない。
- 11) IV155-582-3。「私は相続人のいない宝物の責任を負うこととなり、またフランスの主権を行使することとなった」の下線部は、村上光彦訳で「フランスの政権を引き受けることとなったのである」となっているが、事実としての臨時政府首班というよりむしろ天啓による主権者と自己認識している点を際立たせようと訳語を改めた。ド・ゴールがフランスなのである。
- 12) 歴史家は、スターリンと和やかに会見するド・ゴールを、2年後には米ソ対立に乗じてみずから率いるフランス人民連合で反共色を強め、その7年後にはドイツの再軍備を促す欧州共同防衛構想を「潰すために共産党との暗黙の共闘を組むことになる」、ひとりのマキャベリ主義者として描くだろう。渡辺和行・南充彦・森本哲郎『現代フランス政治史』ナカニシヤ出版、1997、p.166
- 13) Charles De Gaulle, *Mémoires*, p.904 有田前掲論文（註3）参照、210号 p.79
- 14) *id.*, p.950 《Alors, pour moi, sa voix [au peuple] sera la voix de Dieu.》「民の声は神の声（Vox populi vox Dei）」を思わせる表現。
- 15) *id.*, p.1358 Guyard による註。
- 16) 冒頭の村上光彦訳は以下の通り。第三巻「救済」までの道程が、さながら幼年時代の体験から一直線であるかの語り口である。「生涯を通じて私は、フランスについてある種の観念を胸のうちに作りあげてきた。感

情のみならず理性もまた、私の心に、それを吹き込むのである。私のうちなる情的な要素は、おのずとフランスを、お伽噺の王女や壁画に描かれた聖母さながら、ある卓越した類例のない運命にささげられているものと思ひます。(中略) わが国は、そのあるがままの姿で、これまたそのあるがままの他国のなかに伍しつつ、死にいたる危険を冒しても高きに目標をさだめ、毅然として立たねばならない、と。つまり私の考えでは、フランスは偉大さなくしてはフランスたり得ないのである。」(I6-5)

17) De Gaulle, *Mémoires*, p.1194, p.IX

18) ド・ゴール作品は「文学」であり、該当するフランス現代史はリセ第一学年（最終学年の前年）に歴史の授業で習うのだから、国語科の必修教材になってかまわない、とは『フィガロ』紙インターネット版（2010年6月3日配信）で論争をまとめたモアメッド・エサウィの記事の趣旨である。《Du côté de la commission, on explique d'abord que la période historique en question est étudiée par les élèves de première - il n'y a donc pas lieu de s'inquiéter de la mise en perspective historique. Quant à la valeur littéraire des *Mémoires de guerre*, elle ne se discute pas. Personne n'avait contesté l'entrée dans la très littéraire collection 《La Pléiade》 du chef de la France libre, voilà dix ans.》